

(二) 全国大学史資料協議会

一九九七年度総会ならびに全国研究会

私立学校を主体に活動を始めた大学史担当者の会合は、年を追う毎に会員校が増え、国立大学からの参加者も加わり、一九九七年五月現在、会員校六二校、個人会員二四名を数える全国大学史資料協議会へと発展した。

この協議会の第二回総会ならびに全国研究会が一九九七年十月十三日から十五日までの三日間、杜の都・仙台において開催された。今回は東北大学金属材料研究所講堂を主な会場に、東北大学、東北学院、宮城学院の資料室の皆様のご協力のもと、参加校四五校、個人会員も含めて出席者八七名という、前回を上回る盛会ぶりであった。

まず総会を始めるにあたって会長校・神奈川大学大学資料編纂室の澤木武美氏と会場校・東北大学百年史編纂室の今泉隆雄氏の挨拶があった。そして、役員会審議の報告、一九九七年度の活動計画の報告があり、総会は終わった。続いて講演会に移った。

今回の研究会で特筆すべきは、講演者に海外の現役アーキヴィストを迎え、有資格の専門家の語るアーカイヴズとアーキヴィストについての講演を初めて伺ったことである。講師のケニス スミス氏(Mr. Kenneth E. Smith, BA)は一九八〇年から一七年間オーストラリア、シドニー大学の大学アーキヴィストを務め、現在はその職を退いておいであるが、今までの経験を「シドニー大学アーカイヴズ―過去、現在そして将来」と題してご講演下さった。一時間余りにわたる講演はもちろん全て英語によるものであったが、事前に提出された草稿の邦訳(桃山学院年史委員会の西口 忠氏による)が準備されていた。シドニー大学の大学アーカイヴズと大学アーキヴィストの歴史、史料の保存とその利用について、熱のこもった講演であった。

講演終了後、通常なら自由に質疑応答を行なうところであるが、通訳を必要とするため時間の制約もあり、事前にアンケートによって集められた質問内容にスミス氏が答え、その答えを西口氏が通訳するという形で一五分ほど質疑応答の時間をもった。

このあと東北大学記念資料室を見学した。記念資料室は一九六三年に設置され、一九八六年に現在の場合・旧図書館に移転、独

立の建物を得た。東北大学では大学史資料を伝統的に記念資料と呼んでいる。一九二五年建築の図書館もそれ自体が記念資料であり、二階の旧閲覧室が展示室となっている。高い天井、広い空間に恵まれた部屋であった。展示室の一隅をパーティションで区切って収蔵庫が作られていた。中にはスチール製の棚が立て並べられ、通路は一人が横歩きで通れるほどの空間しかなく、主に未整理のものが箱に入れられて納められていた。一階には事務室と百年史編集室があった。

懇親会は会場を東北学院同窓会館に移して催された。お世話役の宮城学院資料室の渡邊弘道氏のユーモアあふれるスピーチやスーザン スミス夫人 (Mrs. Susan Smith) の挨拶、有志三人による歌の披露など、今まで以上になごやかな親睦の一時となった。会場のあちらこちらで、情報交換や意見交換のため熱心に話し込む姿も見られた。

二日目の全国研究会は前日と同じ会場で、例年通り、午前に報告、午後にパネルディスカッションという形で行なわれた。

午前の報告では、東北大学百年史編集室の中川 学氏と東北学院大学副学長の出村 彰氏にご報告いただいた。「大学史編集と資料保存の現状―東北大学の場合」と題して、中川氏は、資料室の活動の比重が資料の保管・整理からレファレンスへと変わってきていることをあげて、東北大学での現状を明確な口調で説明された。出村氏は、一般論的な史料方法論になるかと断わりつつ、「学校史編集の課題と目標」として、物語としての読みやすさと歴史としての厳密さをいかにバランスよく書くかという課題と史料保存のための物的、人的問題について話された。今回の質疑応答は各報告のあとにそれぞれ行なわれた。

午後のパネルディスカッションの統一テーマは「大学史編集をめぐる諸問題」。関西大学事業局出版部出版課の熊 博毅氏、中央大学大学史編集課の松崎 彰氏の司会で三人のパネリストの発表があった。大乘淑徳学園長谷川仏教文化研究所の三好一成氏は「総合学園の年史編集について」と題して編集の経緯を説明された。大乘淑徳学

左から西口忠氏, Mr. Kenneth Smith,
Mrs. Susan Smith

園では総合学園としての歴史を書くために各学校の資料の分類、配列に留意したとのこと。国士館大学国士館資料室の佐藤芳郎氏は「国士館創立八十周年記念誌(写真集)づくり」を発表、写真集作りの留意点を具体例を挙げて述べられた。関西学院学院史資料室の川崎啓一氏は「関西学院百年史編纂と資料編」という題で、スムーズに編集するための体制作り、特に史料確認のプロセスを担当教授と連携して行ない、そうしていかに編集側のベースにもっていくかというかけひきの巧みを明かして、聞き手が納得し思わず笑みを浮かべるような報告をされた。このあと質疑応答の代わりに早稲田大学大学史編集所の金子宏二氏のコメントがあった。早稲田大学では百年史編集が終了したので、今後の資料室の活動について学内の動向もあわせて説明された。続いて同編集所の佐藤能丸氏から公本と定本という二段がまえで行なった編集方針と紀要についての説明があった。

最終日、会場を東北学院に移し、午前中に元東北学院資料室の竹井一夫氏(詩人・藤 一也氏)のお話を伺った。竹井氏の演題は「初期東北学院の文学者達―『各論』編をめぐる―」であったが、東北学院百年史各論編の史料問題を主に述べられ、特に原史料と異なる情報が定説になることがあるという点を強調された。このあと東北学院大学中央図書館貴重書庫を見学した。貴重書庫は中央図書館五階にあり、三方の壁にガラス・ケース、中央にもガラス・ケースを並べて貴重書の展示を行なっている。東北学院広報室室長・宮村光一氏によれば、貴重書庫以外にも貴重書が分散して保管されているが、未整理のものが多いいという。学報等で資料紹介をしたものに通し番号をつけてその都度展示替えをしているとのこと。午前の日程は三十分近くオーバーして終了した。午後は自由参加のバスハイクが計画されていたので、貴重書庫を自由に見学したあと解散となった。

初めて海外事情に触れる機会となったこの度のスミス氏招聘にあたっては、梅花学園総務部資料室の遠藤トモ氏と桃山学院の西口氏のご高配によるところが大きい。お二方のご尽力によつてこのような貴重な機会を得られたことに厚く御礼申し上げる。また、今回の総会、研究会の企画、運営にあたって下さった役員校、会場校の皆様にも改めて感謝申し上げます。来年度の全国研究会の更なる発展と充実を願っている。